
エッジ トゥ エッジ

かるり

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

エッジ トウ エッジ

【Nコード】

N 8 3 7 6 Q

【作者名】

かろり

【あらすじ】

物語は終焉から始まる。

ゴミクス達の物語。

何もかもが最低のお前等はどう生きる？

一閃を垣間見ることができるのか。

捻くれ者

？

漆黒の闇を煌びやかなネオンライトが明るく照らし、飲み屋や、キャバクラの看板が人を快樂へと誘う。

深夜にもかかわらず、人と車が窮屈そうに辺りを蠢く。その人声や、物音の喧騒を離れ、ネオンライトの光が届かないビルとビルの間を縫うと、裏路地に差し掛かる。

冷房の室外機から温い温風がかき混ぜられ、都会に放たれる。

青や紺のポリバケツにはゴミが窮屈そうに詰められ、周辺にはゴキブリの死骸が転がっており、ドブネズミが貪るように食いつく。

裏路地を右に曲がったところに見える一本の黄ばんだライトが蛾などの害虫を呼び寄せ、闇を、建物を、微かに照らす。無機質な貸しビルが間隔を空けずに並んでおり、「鳴神ファイナンス」はそれらの一角を成す、彼らの拠点だ。

黒のファイルケースで整理整頓されている書類に、一寸の澱みも微かな指紋も見当たらないガラス窓、チカチカと真つ白な光を放つ蛍光灯の下、梶は自らのデスクに斜めに向かい、回転イスの四足の二つに脚を置き、キイキイ言わせながら電話をかけていた。

「もっし〜？、小幡か？」

『あつ、梶さんっ』

「よう、おめえの返済期限がとつくに過ぎてるっつーのに利息分すら持ってこねーとはどういうことだ？しかも、ようやく電話も繋がったしよ。」

25回目にしてようやく電話が繋がり、新人の梶には怒りより疲れが先行した。

『すすす、すいません、まだお金が用意できていないんです。来週、いや今週末までには用意してみせます。』

小幡は独特のどもりと耳に響く甲高い声を披露した。梶は暑苦し

い鼻息と吐息をこちらの耳にまで響かせ、学校帰りのお気に入り女子高生をストーカーして、無言電話をかけてくる四十半ばの変態中年男を相手にしている気分になり、居心地が、胸糞が悪くなった、と同時に身震いした。

「馬鹿野郎！来週も再来週もあるか、俺は今日までに持ってこいって言っただけだ！勝手にためえで期日を決めるなよ！とりあえず、明日有り金全部持って事務所まで来い。利子すら払えねーようなら、仕事を紹介してやるからよ。」

仕事の紹介——聞こえはいいが、実際には過酷な労働が待っている。借金が少ない場合には、ドラッグの運び屋、捌き屋として使われ、借金を返せば解放される。運び屋は指定された場所に向かい、ロッカーなどに入っている食料品やら、日用品やらをヤクザに運ぶだけの仕事。勿論、大根の中にはくり貫かれた空洞が存在して、焼き鳥の缶詰の中には焼き鳥などが二つ三つ、あとは袋詰めされた粉がぎっしりが入っている。捌き屋はまたしてもヤクザからドラッグを請負い、指定された場所に立ちんばになって希望者にドラッグを渡す。

大体、一グラム七万の相場だとして、捌き屋の懐には四万ほど入る。客が十グラム買えば、四十万が手に入る寸法だ。だが、大金を得る代わりに多大なるリスクを背負うことになる。警察にしょっ引かれたときはヤクザの名前を出すことは絶対にタブーであるし、もし、誰かに他言してしまえば、本気で命はなくなるだろう。

逆に、多くの闇金から借金をしている多重債務者の場合は零細企業や、国家に名前を貸し、リスクの高い詐欺などに加担させ、一気に金を引っ張る方法もある。また、漁船や工事現場などで重労働を負担させ、軟禁。いわゆる、タコ部屋に送らせて金を返すまで強制労働させたりもする。タコ部屋では低賃金の上、休むことなく働かせられる。基本的に食事は質素なもので、権利者の残飯、賞味期限の食べ物、腐りかけたパンなどが与えられ、休憩以外に少しでも手を休めたら足蹴りが飛ぶ。もちろん、扉は施錠されるので、逃げる

ことはできない。

これらの仕事ではヤクザの介入がほとんどであり、闇金の借金を全額返済したところで、ヤクザに多少の恩恵がない限り簡単には解放してはくれない。

『わかりました、では明日までには必ずお金を準備します！』

「できるのか？」

『はい』

小幡は心もとなない声で答えた。

「だったら最初から持ってこいよ！」

『すいません！』

「じゃあ明日待つてるからな——」

相手に聞こえるように手に持った受話器を本体に打ち付けた。

安堵感が体中を駆け巡る。カルシウムを求めさ迷う血液はゆつくりと流れを留めてゆき、脳内では無意識にニコチンを欲していた。胸ポケットからセブンスターとライターを取り出した。ジッポライターから乾いたオイルの匂いが漂い、タバコに火をやった。紫煙が黒々とした肺を埋め尽くす。脳内を快樂物質が安らぎへと誘う。

息を荒げ、肩を怒らせ、電話の子機を己の握力で握りつぶし、コードをギッタギタに引きちぎって、本体ごと思いつきコンクリートに叩きつけて、鉄板の入ったブーツで踏み潰してやりたかった。

破壊活動は妄想で発散され、妙な落ち着きを取り戻した。

——何とか回収の糸口をつかめた。さつさと奴をヤクザに売っぱらってしまいたい。そうすればあいつの面倒を見なくて済む。俺があいつの担当をしている限り、責任がすべて自分についてまわる。もし、しくじってしまったらそれなりの罰を受けるのは当たり前だろう。あんなクズ人間のために被害を受けるなんてごめんだ。

梶は小幡の取立てを担当されている。基本的に金を貸すときは社長が直々に金を渡すのだが、今回は貸しも取り立ても一任されている。つまり、梶以外誰も小幡の顔を知らないし、梶が小幡の全てを管理しなければならぬ。取立てるときはいつ何時でも取り立てに

いく。小幡が飯を食っていようが、風呂に入っていようが、女とい
ようが、上司の前だろうが、クソを垂れ流しているときであろうが
取り立てる。

今までは特に問題もなく、利子を払ってきた小幡だが、今回は電
話を何回かけても、家を何回訪れても姿を見せることはなかった。
そして、やっと電話が繋がってこの有様だ。

奴は明日払うと言っていたが、払うことができるのだろうか？今
までは素直に利子だけでも払っていたから手荒なマネはしなかった
だが、今回だけは怪しい。払う気どころか、払う金がないのは俺が
一番知っている。

小幡は完全なギャンブル依存症の男。仕事がりストラになり、毎
日をパチンコにつき込み、借金まで作って生活を狂わせている。ビ
カビカと高音を鳴り響かせ鼓膜が破裂しそうなくらいの騒音。目に
見えるほどに広がった霧のように白いカーテン状に形成されたのタ
バコの悪臭。店内とはうって変わって玄関で来訪客を待つようなく
らい、まばゆい配色。薄暗いオレンジのライトと磨き上げられた便
器によって周囲をモダンな雰囲気で行むトイレ。小便をして生臭い
股間を触った、綺麗なトイレとは似つかない見知らぬ親父はハンド
ルを握る。そのハンドルを人は代わる代わるに喜んで握り、曇った
銀色の集合体に念を込めて弾きだす。黴菌と病原菌が付いたその手
で飯を食らう。パチンコ屋の食堂で。当たれば脳内を狂喜と安堵が
駆け巡り、緊張感が解かれる。外れれば焦燥が脳内を焼き尽くし、
精神を腐敗させる。結局は財布が空となり、自分の行いを必死に正
当化する。今日はこれでよかった。次に勝てばいい。俺にはそんな
ゴミ・クズのようなマネは到底できない。そして、今まで借りてき
たサラ金も悉く踏み倒して、うちに泣きついてきた。

どうしようもないクズ男。

——・・・逃げる？まさか、あいつにそんな度胸があるのか？い
や、だからこそ逃げるのか。度胸がないから逃げる。目の前の現実
と向き合わずに、状況が良くなると思っっている贗物の幻想へと逃げ

る。酒、娯楽といかにもオブラートに包んだ言い方で現実逃避をする人間は世の中にゴミのようにいる。俺もその一人だ。だが、小幡は最悪なパターン。もし、世の中に現実逃避チェック表があるとしたら――十のうち小幡は確実に十の位置に食い込む。現実から逃げて、逃げすぎた上にさらに借金取りから逃げる悪態をつこうとしている。

実際は逃げたところで犯罪者のようにビクビクと借金取りを恐れて隠居するハメになるだろう。

よく借金物のドラマなんかにある、催促の電話が何回も鳴り止まず、ドア越しから怒声と罵声を浴びせられる状況を回想した。布団で身体を覆い隠し部屋の隅っこでひたすら音という音が鳴り止むことを待っている小幡。普段神にも祈らんくせに自分の都合だけで神の力を要求し、懇願する小幡。

卑怯者の性根は腐つても卑怯だ。

錯乱する脳内を紫煙で燦らせた。たとえ小幡みたいな奴のために妄想とはいえど、頭を使うことが腹立たしかった。

携帯を取り出し、一枚の男女が写った画像に目をやった。男は虚ろで投げやりな表情をした青年。微かに当惑と照れを隠している。対照的に目じりは下がり、歯並びの良い真っ白な歯を前面に輝かせ、薄い唇を三日月型に広げた、眩いほどの柔和な笑顔をした女。例えるならば天使がいいところだろう。頭の中から数ページの辞書を広げて検索をかけた。ボキャブラリーの自信はなかった。しかし、かの女を喻えるならば、天使という、装飾を一切加える必要のない言葉が相応しく、まさに、後光が差すほどの美しさであった。

一人のぎこちない青年と一人の天使が微笑ましく写りこんでいる写真を見て、梶も柔らかな気持ちで胸が一杯になった。この写真を見ることで何もかもが癒され、救われる。憤怒と当惑が交錯したドス黒い心を、目の奥で荒れ狂う真っ黒な闇を、聖なる光と清らかな癒風が優しく包み込むように撫で下ろした。

梶は入社したての新人。中性的な顔立ちで、人に聞けば何歳も下

に見られる童顔。髭はきつちりと剃られており、眉毛も剃り残しを防ぐため、ピンセットで抜いている。服装は高級ブランドで固めており、アルマーニのスーツに、派手な紫のシルクのシャツ、ブルガリの時計にブルガリのネックレスをちらつかせ、エルメスの紳士靴を履いていた。香水はブルガリのブラック。香水の爽やかな香りを三倍増しで体に振りかけ、ヘビースモーカーの服の悪臭と上手い具合に混ざり合い、街行く人の鼻を不快に掠め、胃の逆流を促す。

髪は毛先がたわしの如く痛んでいる黒髪、肩までかかった長髪。ワックスを使った髪セットに1時間を要し、櫛で逆毛を立て、一本一本の髪を手で捻じりながら鏡と睨めっこをする。髪型はアニメやゲームに登場しそうな、ハリネズミを彷彿とさせる、いわゆる『盛り』ヘアを好んだ。

元々は九州で家族と同居していたが、両親は幼い頃に他界し、叔父の家に引き取られた。度重なる嫌がらせや叔父のせがれとの差別を受け、十八で上京した。

何のあてもなく、新宿でフラついていたところ、同じ髪型をした金髪の兄ちゃんにスカウトをされ、水商売をすることとなった。

入りたての頃は独特の初々しさと礼儀正しさが客を寄せ付け、それなりに客がつくようになった。だが、仕事を続けるにつれ、傲慢な鼻が伸びてゆき、持ち前の長所を忘れていった。貧乏な客にはコンビニの接客の如く適当にあしらい、暴言を飛ばすようになった。

金持ちには当然へこへこ頭を下げ、喻え醜悪で異臭がする女をも金があれば枕営業に持ち込む。結果、客からは見限られ、売上は減っていった。それから毎日安い酒で自棄酒をあり、一人、欲がうごめく街でふらついていた。

時折、街で自分より背丈の低く、痩せていて、弱そうなサラリーマンや学生を見つけては張りのない丸帯びた肩をぶつけ、難癖をつけ、強引に裏路地に連れ込み、金をせびった。抵抗するものなら、ヤクザがバックに付いているとも言っておけばいい。大抵の奴は半泣きになって金で赦しを請う。弱い者力ツアゲ。それでも折れな

い奴には物で分かせてやった。標的の背に壁を作り、スーツの内ポケットに忍ばせてあるナイフを相手の喉下に突き立てる。毛頭刺す気などはないが、脅しとしては十分で、すんなり財布の中身を寄付してくれた。

あるとき、自分より3つほど上のリーマンを狩ったとき、こげ茶の古ぼけた財布の中に二歳ほどのガキとその親の写真が入っていたこともあった。まだ新婚のようで、両脇でとても小さな白くてマシユマロのようなガキの手を握る二人。屈託のない笑顔を振りまき、ピースのポーズを取る二人。おそらく、ガキは言葉を覚えての頃であろう、燦燦と世を照らす太陽のような笑顔で二人を癒すガキ。一寸の罪悪も感じずに狩った。むしろ、写真を見たときの三人の純粹な笑顔に対して背中から全身にかけて虫唾が走った。卑屈な苛立ちを感じずにはいらなかった。そいつを何度も角材で殴ってやったあと、財布ごとかつぱらって溝の中に投げ込んでやった。

店では万引きの類をしていた。万引きで捕まった馬鹿中高生がよく言うスリルなどが目的ではなく、日ごろの鬱憤が溜まっているときに行く、単なる憂さ晴らし。店に対する八つ当たり。社会に対する制裁。欲望の渦巻く歌舞伎町では弱肉強食が当たり前だった。当たり前だと思っていた。

——つまらねえ奴等め、毎日同じことの繰り返しで楽しいか？お前らの人生は平凡すぎる、俺が金を代わりに使ってやるよ。

俺には夢がある。お前らみたいな平凡な生活なんて望んではない。朝から鬱陶しい口臭が蔓延した満員電車で詰め込まれ、無神経な若者のイヤホンから流れる下品で不快な音楽に目を覚まさせられる。出勤早々嫌いな上司に諂い、年下の部下にはタメ口を利かれ、屋上でタバコをふかし、少なくなった残りの本数の吸い時を考える。ようやく仕事が終わったと思えば、部下が残して言った残業が待っている。顔全体にまんべんなく脂を乗つけて、仕事終わりに風俗に行き、図々しく風俗嬢に説教するも結局は行為を行う。家に帰れば、妻には言い訳のオンパレードで適当に済まして、黄ばんだシャ

ツを放り投げて風俗嬢の汗と唾液と共に、既に垢や髪の毛が浮いている憩いの風呂場に飛び込み、汚物をかき混ぜる。

冷や飯を食らい、晩酌は安い発泡酒一本。ゆとりもなく床に就く・

・お前らとは違う。

将来は会社を立ち上げて大企業の社長になって大金持ちになるんだ。そして、立派な車を買う。フェラーリなんてどうだ。青年実業家のステータスを示すにはもってこいの車だ。

高級レストランを貸し切りにして、フルコースを自分のためだけに運んでもらうのもいい。もちろん、可愛い女を何人も嫁にして、毎日代わるがわる女を入れ替えて一晩中性欲に駆られる日々を過ごす。だが、どこかの金持ちがやっていた、金で女を買うことはしたくない。プライドは高いし、愛のない性交ほど虚しいものはない。

一般人より何倍も裕福に暮らしてやる。卑陋な知見が頭を渦巻いていた。

梶は自分を励ますように心で叫んだ。

——なんのあてもなく、保障もない生活。ある意味では同じことの繰り返し。認めたくはなかった。そして、心の奥底では多少なりとも彼らが羨ましく、妬ましくもあった。

いつからか差別的な考えを持つようになった。プライドも高くなった。基本的にダサイ奴は相手にしない、頭の悪い発言をする奴は相手にしない、そうして自己のヒエラルキーを確立していった。かといって、目上を敬うことはしなかった。

おかげで新たな友人もできず、孤独と寂しさに毎日を脅かされていた。寂しがりやの一匹狼。

寂しくなったとき、辛くなったとき、怒りでどうしようもなくなったとき、あらゆる感情に振り回されるとき、梶は携帯を開いて一枚の画像に目をやる。そうすれば、いつだって、どんなときだって、何事をもやり切れる力を貰えるのだ。

この写真は今から二年前にさかのぼり、撮影されたものだ。

梶は当時も相変わらず自分より弱い者へのカツアゲをしていた。

そのときの目には薄暗いフィルターがかかっており、瞳孔には微かな光すら宿していなかった。

あれはスコールとも呼べる大雨が降り続いていたときだった。豪雨と落雷が自分を襲い、闇に乗じて小遣い稼ぎを行っていたときだ。奴らと目が合った。地域を牛耳るチーマーのような集団だった。

5人がかりで拘束され、バンに詰め込まれ、湾岸沿いの人気のない倉庫に連れていかれた。目にはアイマスクを装着され、手足はロープで拘束、屈辱にも服を脱がされ、全裸で数人がかりによるリンチが休むことなく続けられた。体はおろか、梶の比較的端整な顔立ちも見るも無残な姿となった。

こいつらの目的は一体なんだ？ 獲物を食い散らかしたことで怒っているのか？ カツアゲなんかただの憂さ晴らしのつもりだったのに、こんなことになるなんて――

梶は見知らぬ天井の下で意識を取り戻した。心地よい風がカーテンをなびかせ、梶の身体をまた心地よく通り抜けた。と、同時に自分の絶望とも呼べる姿に愕然とした。

*

午前十二時を回って日付が変更となったその頃、小幡は受話器を持ったまま凍りついていた。

貸しアパートの四畳半のフローリングに敷かれた黴臭い布団に倒れこむようにしてうつ伏せになった。全身に疲労が駆け巡る、と同時に体中に溜め込まれていた脂汗がどつと噴き出した。

無理もない、小幡は闇金などの裏社会とは全く縁のない無関係な人生を歩んできていたし、まさか自分が債務者になるとは夢にも思っていなかったはずだ。そして今の自分の置かれている絶望的な状況を直視することができず、一人間として認めたくはなかった。すなわち、債務者というものは人間であって人間ではない生き物であるということに自覚していた。

フケやらシラミやらが住居としていそうな、だらしく伸びきった、お世辞にもロン毛とはいえない難いボテボテの髪、顎全体を細かく覆う無精髭、袖部分がよれよれのシャツとパンツ、毛穴から出る油と吹き出物だらけの中年のおっさんの生活は見て分かるとおり、不規則、不安定、不健康であつた。おまけに収入も短期の派遣のみで食いつないでいる。明日にでも浮浪者となりえる、ホームレス寸前の生活を送っていた。

——はやく逃げる準備をしなければ……——

自分の行為が正義であるか、悪であるのか、自己問答する余裕などとはなかった。ただ、この場をすぐにでも去りたい気持ち一心だつた。

小幡は色あせた朱色のポストンバッグを手に取り、山積みになっているゴミの巣窟を物色し始めた。

もう何日も洗っていない衣類が埃もろともバッグの中にぶち込まれた。

緑茶の入っていたらしいペットボトル飲料は真夏の強烈な紫外線を浴び、茶色の気味が悪い物体に姿を変え、白い沈殿物が底に居座っていた。キャップを開けてみると、卵の腐った臭い、いわゆる硫黄の臭いが部屋中を立ち籠めた。

小幡は堪らず嘔気を催したが、何とかその物体をシンクに流し、水道水で濯いだ。ペットボトルを洗い流したあと、カルキ入りの水道水で中を満杯にし、バッグの中に投げ入れた。

小幡の着ているシャツは夏の暑さと焦燥が引き起こす大量の汗でずぶ濡れになり、動くたびに鼻から汗が滴り落ちていった。室内にはもちろんエアコンという高価なものはなく、扇風機でさえ雀の涙ほどにもならない小額で売り払った。

部屋中から掻き集められた小銭と二つ折りされた夏目漱石をポケットの中に流しこみ、足元に散らかるゴミを左右に押し分け、部屋を出て行こうとした瞬間、忘れ物に気づいた。

既に故障しているラジカセのカセットの挿入部分に忍ばせておい

たそれを徐に取り出し、中身を確認した。
それはとても大切なタバコの入っていないタバコの箱だった。

＊

ボロアパートのノブが軋み、ゆっくりと扉が開かれた。夏の風が運ぶ太陽の香ばしい匂いと肌を刺す青く透き通った風が小幡の絶望を取り払った。清々しさを感じることで、新しい生活に対する希望を抱かずにはいらなかった。

ドアのポストには借金取りや、業者からのラブレターが入りきらんばかりに詰め込まれていた。もちろん、ドア下や周辺にも足跡付きの手紙があり、いかにも小幡の身代わり役をかってでているように見えた。

ドアを一瞥し、スラスラと忍び足で足音を立てずに静かに階段を下ってみせた。さながらゲームで敵に見つかるまいとする逞しいスパイの主人公を演じた。

なに？敵が目の前の角に潜んでいる？了解、暗視型サーモグラフィで敵の動きを察知する。相手の武器は四十五口径のコルトM1911A1か、アメリカ軍で採用されている銃だな。仕様はシングルアクション、装弾数も7発のみ。対して、こちらは高性能ビームライフル。相手に勝ち目はないだろう。

すぐに我に返った。自分は全く遅くないし、スパイでもない。敵？口がうるさくて、ねちっこい大家に見つかるのが怖いだけだった。

家賃は3ヶ月滞納、本日が催促の末に支払いを取り決められた日のため、大家に会わせる顔はなかった。さすがに、申し訳なくはあったが、他人の心配をする余裕などは勿論なかった。

すべてを捨て去ることを覚悟の上で、小幡は外へ繰り出した。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8376q/>

エッジ トウ エッジ

2011年2月12日01時40分発行